

学びに向かう力への 第一歩

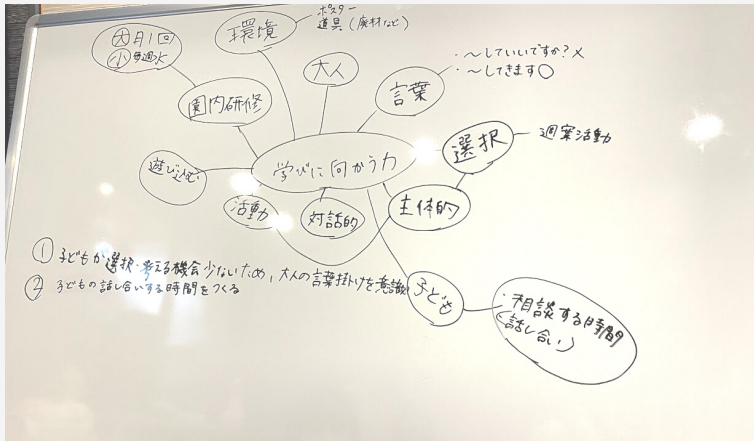
すみだ川のほとりに笑顔咲くほいくえん



子どもの主体性を育むためには ～職員の言葉かけと対応を意識して～

園が開園してから数年が経ち自分たちの保育を振り返ると、園の子どもたちは困っていても「〇〇だから～してほしい」と言えずにいたり「～してもいいですか」と保育者に許可を求める姿が見られている。職員間でその原因を考えた。

会議を重ね、園では保育者が子どもに手をかけ過ぎてしまい、先に答えを出してしまったりすることが多く、子どもが自ら選択し、考え行動する機会が少ないことが原因なのではないかという仮定した。

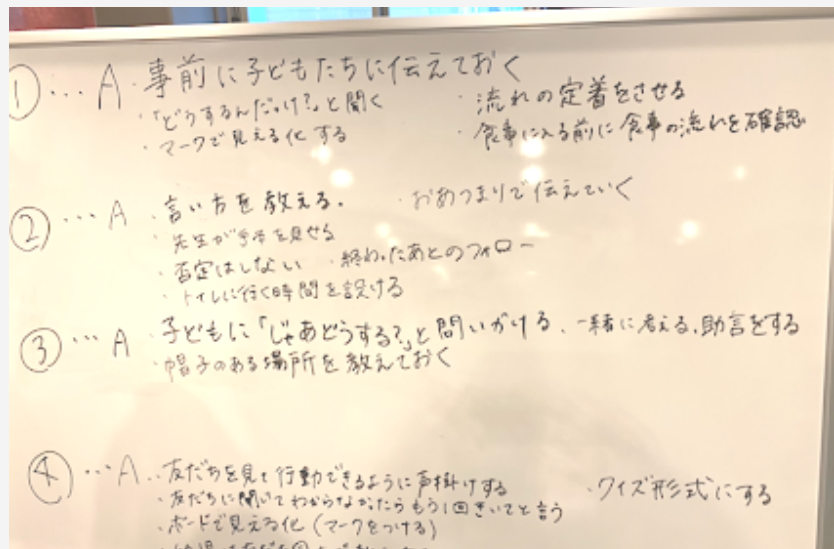


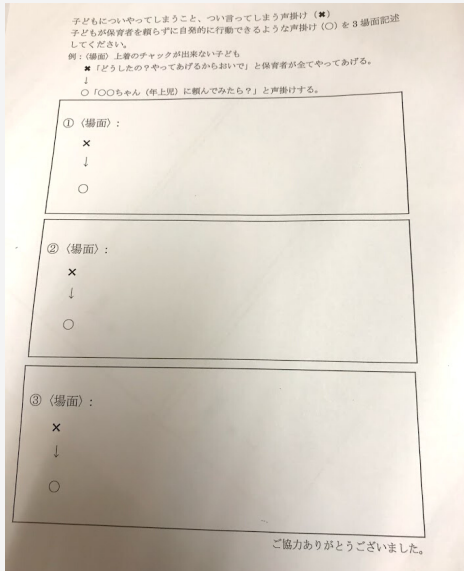
更に考え、調べていく中で“子どもの主体性”が“学びに向かう力”に繋がることが分かった(左写真参照)。上記の内容を職員間で共有し子どもが“学びに向かう力”を養っていくにはどうしていくべきなのかを話し合った。その結果、まず保育者の子どもに対する言葉掛けや関わり方を変えていけば、子どもの“学びに向かう力”が育まれるのではないかと結論に至った。よって、9月～12月末までの子どもに対する保育者の言葉掛けや関わり方の意識の変化を記していく。

職員同士の共通理解に向けて

1. 園内研修

第一に、園内研修を通して実際に見られた子どもが保育者に許可を求める事例をもとに、3～4人のグループに分かれて事例検討を実施した(下写真参照)。各グループの意見を出し合い、子どもの自主性を育むための保育者の言葉掛けや行動の共通理解を図った。





2. アンケート

職員同士で言葉掛けを意識してどうだったかの共有を行い、日々の言葉掛けを振り返るためのアンケート(左写真)を行った。

3. 方法

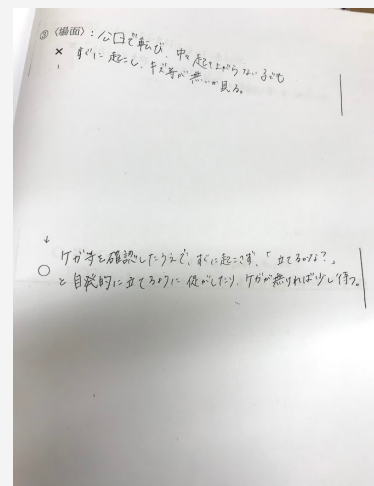
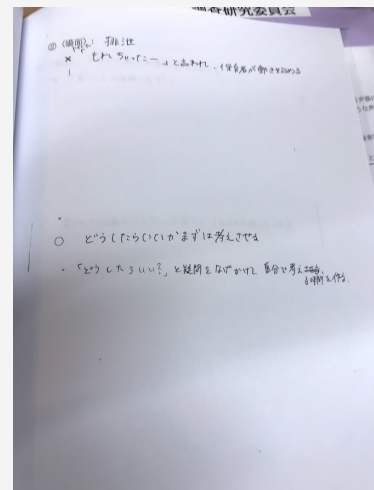
12月から毎日の連絡会議を通して、その日の司会担当の職員がアンケートの内容を一問一答方式で質問。参加している職員が答え共有、振り返りをしている。(園長、主任含む職員8名 5分程)

言葉かけの変化

共有した思いを保育者が意識して行動するとすぐに子どもの行動に変化が見られた。以前は子どもからの発言を待たずに「次は○○だよ」と声を掛けたりすぐ手を掛けたりする姿が多かったが、保育者が一度立ち止まり見守り「どうしたらいいかな?」「どう思う?」「○○くん(年上児)に頼んでみたら?」などと主体的な行動に繋がる言葉かけを意識し促すことが増えた。

12月から日々の言葉かけについてさらに共有、振り返りをしたことで一人ひとりが意識し、それを実行しようとする思いに繋がったように思う。また、保育者自身が子どもたちに対して望ましい言葉かけのバリエーションも増やすことが出来た。

その結果、子どもが“○○だから～してほしい”というように自分が今、何に困っていて、何をしてもらいたいかを言葉で伝えられるようになったり、保育者に確認せず、まずは自ら判断して行動したりと主体的な発言や姿が増えたように感じる。また、年上児を頼り手伝ってもらったり教えてもらう姿が増えたことで協同性に繋がる姿も見られた。



保育者の見守りと意識

まずはじめに、園内研修で子どもが主体性を育むためには保育者がどのような関わり方をすべきか、共通理解を図ったことで一貫した保育を行うことが出来た。職員間で急に意識を変えることは難しい部分もあったが、子どもたちの為に変えていこうという思いを共有し伝えたり、アンケートを通して言葉掛けについて振り返ることで、一人ひとりが意識出来ていた。すぐに変化も見られ、子どもたちが自分で考え行動するという姿にも繋がり、それが自己肯定感や“学びに向かう力”になっていくと考えられた。また、保育者が言葉かけを意識することによって子どもが年上児を頼るなどの協同性も育まれたといえる。

始めに考えた“学びに向かう力”について保育者や友だち、言葉などたくさんの方が繋がっていくことが明確になった。だが、全職員が長い時間に渡って言葉かけを意識することが難しい姿も見られた為、今後も引き続き一人ひとりが意識の統一をできるように様々な方法を取り入れていきたい。

参考文献:

田中 麻紀子 「子ども気持ちを引き出す保育者の言葉やかかわり」、
『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』